

芸術人間学特講	通年 4 単位																																	
自然・技術連関・芸術	橋本 典子 (はしもと のりこ)																																	
<p><b>【ねらい】</b>          本科で学んだ芸術人間学をさらに深め、自分の制作、論文作成等と結びつけ、芸術を総合的に勉強することを目指す。本科及び専攻科での勉強を通じて芸術人間学を明らかにする。授業に参加し、必要に応じて自分の考えをまとめ発表することを訓練する。</p> <p><b>【授業計画】</b></p> <table border="0" data-bbox="109 328 1070 743"> <tr> <td><b>【前期】</b></td> <td><b>【後期】</b></td> </tr> <tr> <td>第 1回 序論－芸術人間学のまとめと展望</td> <td>第 1回 前期のまとめ－芸術解釈と価値</td> </tr> <tr> <td>第 2回 芸術と価値</td> <td>第 2回 日本の美学 1－歌論</td> </tr> <tr> <td>第 3回 超越的価値との関わり</td> <td>第 3回 日本の美学 2－能楽論</td> </tr> <tr> <td>第 4回 &lt;よく生きること&gt;と芸術</td> <td>第 4回 日本の美学 3－自然と芸術</td> </tr> <tr> <td>第 5回 芸術創造と観照－プラトーンの「美の学」</td> <td>第 5回 日本の美学 4－芸術と人生</td> </tr> <tr> <td>第 6回 理性による美の発見－諸芸術の比較</td> <td>第 6回 日本の美学 5－芸術に於ける「間」の問題</td> </tr> <tr> <td>第 7回 芸術と宗教－聖書と芸術</td> <td>第 7回 芸術と空間論－抽象化と現実</td> </tr> <tr> <td>第 8回 孔子の芸術哲学－超越の問題</td> <td>第 8回 芸術と時間論－音楽的時間</td> </tr> <tr> <td>第 9回 芸術解釈の構造</td> <td>第 9回 美の現象学－芸術作品の層構造</td> </tr> <tr> <td>第10回 解釈学－リクールとガダマー</td> <td>第10回 芸術と象徴－カッシーラー</td> </tr> <tr> <td>第11回 人間の生活と洞窟絵画－原始芸術の意味</td> <td>第11回 ニーチェの美学</td> </tr> <tr> <td>第12回 原色の時代－現代における「生」の意味</td> <td>第12回 想像力の構造－バシュラール</td> </tr> <tr> <td>第13回 模倣と表現－芸術の東西比較</td> <td>第13回 自然の五元素と想像力</td> </tr> <tr> <td>第14回 東洋絵画の本質－気韻生動</td> <td>第14回 現代芸術における想像力の問題</td> </tr> <tr> <td>第15回 まとめ、夏休みの課題と文献紹介</td> <td>第15回 まとめ、芸術人間学の総論</td> </tr> </table> <p><b>【進め方】</b>          我々の環境は自然だけでなく、機械と機械とが機能的に且つ有機的に結びついた技術連関でもある。技術連関は技術と芸術との共生の可能性を実現しているが、その環境の中で生きる我々は、時間的存在という人間性の本質を喪失している。時間性をその根源とする芸術は、技術連関に於いて人間性を回復させる力を持つ。このことを講義形式で明らかにする。</p> <p><b>【テキスト】</b>          必要に応じてプリントを使う。今道友信著『美について』（講談社現代新書）</p> <p><b>【参考文献】</b>          今道友信編『講座美学』1～5（東京大学出版会）その他授業の際に紹介する。</p> <p><b>【評価方法】</b>          レポート（2回以上）：70% 出席及び授業参加態度：30%</p>			<b>【前期】</b>	<b>【後期】</b>	第 1回 序論－芸術人間学のまとめと展望	第 1回 前期のまとめ－芸術解釈と価値	第 2回 芸術と価値	第 2回 日本の美学 1－歌論	第 3回 超越的価値との関わり	第 3回 日本の美学 2－能楽論	第 4回 <よく生きること>と芸術	第 4回 日本の美学 3－自然と芸術	第 5回 芸術創造と観照－プラトーンの「美の学」	第 5回 日本の美学 4－芸術と人生	第 6回 理性による美の発見－諸芸術の比較	第 6回 日本の美学 5－芸術に於ける「間」の問題	第 7回 芸術と宗教－聖書と芸術	第 7回 芸術と空間論－抽象化と現実	第 8回 孔子の芸術哲学－超越の問題	第 8回 芸術と時間論－音楽的時間	第 9回 芸術解釈の構造	第 9回 美の現象学－芸術作品の層構造	第10回 解釈学－リクールとガダマー	第10回 芸術と象徴－カッシーラー	第11回 人間の生活と洞窟絵画－原始芸術の意味	第11回 ニーチェの美学	第12回 原色の時代－現代における「生」の意味	第12回 想像力の構造－バシュラール	第13回 模倣と表現－芸術の東西比較	第13回 自然の五元素と想像力	第14回 東洋絵画の本質－気韻生動	第14回 現代芸術における想像力の問題	第15回 まとめ、夏休みの課題と文献紹介	第15回 まとめ、芸術人間学の総論
<b>【前期】</b>	<b>【後期】</b>																																	
第 1回 序論－芸術人間学のまとめと展望	第 1回 前期のまとめ－芸術解釈と価値																																	
第 2回 芸術と価値	第 2回 日本の美学 1－歌論																																	
第 3回 超越的価値との関わり	第 3回 日本の美学 2－能楽論																																	
第 4回 <よく生きること>と芸術	第 4回 日本の美学 3－自然と芸術																																	
第 5回 芸術創造と観照－プラトーンの「美の学」	第 5回 日本の美学 4－芸術と人生																																	
第 6回 理性による美の発見－諸芸術の比較	第 6回 日本の美学 5－芸術に於ける「間」の問題																																	
第 7回 芸術と宗教－聖書と芸術	第 7回 芸術と空間論－抽象化と現実																																	
第 8回 孔子の芸術哲学－超越の問題	第 8回 芸術と時間論－音楽的時間																																	
第 9回 芸術解釈の構造	第 9回 美の現象学－芸術作品の層構造																																	
第10回 解釈学－リクールとガダマー	第10回 芸術と象徴－カッシーラー																																	
第11回 人間の生活と洞窟絵画－原始芸術の意味	第11回 ニーチェの美学																																	
第12回 原色の時代－現代における「生」の意味	第12回 想像力の構造－バシュラール																																	
第13回 模倣と表現－芸術の東西比較	第13回 自然の五元素と想像力																																	
第14回 東洋絵画の本質－気韻生動	第14回 現代芸術における想像力の問題																																	
第15回 まとめ、夏休みの課題と文献紹介	第15回 まとめ、芸術人間学の総論																																	

環境芸術論		通年 4 単位	
環境と芸術・芸術の社会性		趙 慶姫 (ちよう きょんひ)	
ねらい	人間は自らをとりまく環境から様々な刺激を受けて芸術表現を行い、また芸術によって社会環境を変えてきた。「環境」は現代を生きる私たちにとって重要なキーワードになっている。本講ではファインアートから建築、デザインまで、芸術を環境との関わりにおいてとらえ、その社会性について考える。		
授業計画	<p>【前期】</p> <p>第1回 導入／環境と芸術について</p> <p>第2回 自然環境と芸術1 (芸術の歴史の中で)</p> <p>第3回 自然環境と芸術2 (自然の要素と芸術表現)</p> <p>第4回 自然環境と芸術3 (自然へのアプローチ)</p> <p>第5回 自然環境と芸術4 (ランドスケープ)</p> <p>第6回 建築空間と芸術1 (建築への芸術の統合)</p> <p>第7回 建築空間と芸術2 (建築デザイン)</p> <p>第8回 建築空間と芸術3 (空間づくりとアート)</p> <p>第9回 建築空間と芸術4</p> <p>第10回 都市環境と芸術1 (交通機関、駅空間)</p> <p>第11回 都市環境と芸術2 (道路、橋)</p> <p>第12回 都市環境と芸術3 (公園)</p> <p>第13回 都市環境と芸術4 (サインデザイン)</p> <p>第14回 学生の発表と意見交換</p> <p>第15回 まとめ</p>	<p>【後期】</p> <p>第1回 生活環境と芸術1 (工芸)</p> <p>第2回 生活環境と芸術2 (デザイン)</p> <p>第3回 環境芸術／地域とアート</p> <p>第4回 日本の環境芸術の流れ1</p> <p>第5回 日本の環境芸術の流れ2</p> <p>第6回 アートプロジェクト1 (農村の事例)</p> <p>第7回 アートプロジェクト2 (都市の事例)</p> <p>第8回 アートプロジェクト3</p> <p>第9回 パブリックアート1 (日本の事例)</p> <p>第10回 パブリックアート2 (海外の事例)</p> <p>第11回 パブリックアート3</p> <p>第12回 社会・環境問題と芸術1</p> <p>第13回 社会・環境問題と芸術2</p> <p>第14回 学生の発表と意見交換</p> <p>第15回 まとめ</p>	
進め方	作品例、図版などスライドを多く用いる。学外に出て、環境アート作品や建築の実例を鑑賞するフィールドワークを取り入れる予定。講師自身の制作活動、環境芸術への取り組みの経験を活かした講義にしたい。		
テキスト	必要に応じてプリントを配布	参考文献	授業中に適宜紹介
評価方法	平常点:50% 試験・レポート:50%		

美学特講	通年 4 単位	
美学の現代的課題（美学の問題の共有と、その問題意識の深化）	樋笠 勝士（ひかさ かつし）	
<p><b>【ねらい】</b>  本講座は基本的にはゼミナールの形式を取るもので、例えば芸術現象の様々な具体的な場面を素材にするなどしてディスカッションを心がけたい。同時に履修者のそれぞれの専攻内容や考えたい領域なども生かして、それらを各自自由に取り上げて調査・分析・解釈・発表などすることを通じて、相互に理解し合うような場もつくりたい。授業に対する履修者の積極的な参加意識を期待している。</p> <p><b>【授業計画：前期】</b>  第 1回 打ち合わせ：前期は各人の研究や個性を生かした自由発表の予定。  第 2回 「美学」の問題について 1  第 3回 「美学」の問題について 2  第 4回 自由発表 1  第 5回 自由発表 2  第 6回 自由発表 3  第 7回 自由発表 4  第 8回 自由発表 5  第 9回 自由発表 6  第 10回 自由発表 7  第 11回 作品鑑賞と討論会  第 12回 作品鑑賞と討論会  第 13回 作品鑑賞と討論会  第 14回 作品鑑賞と討論会  第 15回 総評</p> <p><b>【授業計画：後期】</b>  第 1回 後期は作品鑑賞等を通じたディスカッションを中心にする予定。  第 2回 作品鑑賞と討論会  第 3回 作品鑑賞と討論会  第 4回 作品鑑賞と討論会  第 5回 作品鑑賞と討論会  第 6回 作品鑑賞と討論会  第 7回 作品鑑賞と討論会  第 8回 中間総括  第 9回 作品鑑賞と討論会  第 10回 作品鑑賞と討論会  第 11回 作品鑑賞と討論会  第 12回 作品鑑賞と討論会  第 13回 作品鑑賞と討論会  第 14回 作品鑑賞と討論会  第 15回 総評</p> <p><b>【進め方】</b>  ゼミ形式で進める。</p> <p><b>【テキスト】</b>  授業中に指示する。</p> <p><b>【参考文献】</b>  授業中に指示する。</p> <p><b>【評価方法】</b>  プレゼンテーション：40% 平常点：30% 出席：30%</p>		

美術史特講		通年 4 単位	
フランス美術研究：新古典主義とロマン主義		大野 芳材（おおの よしき）	
ねらい	フランス革命から19世紀はじめにかけて、フランス美術は新古典主義とロマン主義へと大きく旋回する。それぞれの表現の特質を、ダヴィッドやアングル（新古典主義）、ジェリコーやドラクロワ（ロマン主義）の作品を手がかりに考えたい。それぞれが誕生し発展した社会的な背景を、ヨーロッパの歴史のなかで考える。		
授業計画	<p>【前期】</p> 第1回 イン트로ダクション 第2回 フランスのロココ美術 第3回 革命前のダヴィッド 第4回 ダヴィッドとナポレオン 第5回 ジェリコー 第6回 ヨーロッパのロマン主義：イギリス 第7回 ヨーロッパのロマン主義：スペイン 第8回 ヨーロッパのロマン主義：ドイツ 第9回 ドラクロワ（1） 第10回 ドラクロワ（2） 第11回 アングル（1） 第12回 アングル（2） 第13回 クールベ 第14回 マネ 第15回 ロマン主義と現代	<p>【後期】</p> 第1回 後期をはじめるとあたりにイントロダクション 第2回 第一文献研究（1） 第3回 第一文献研究（2） 第4回 第一文献研究（3） 第5回 第二文献研究（1） 第6回 第二文献研究（2） 第7回 第二文献研究（3） 第8回 第三文献研究（1） 第9回 第三文献研究（2） 第10回 第三文献研究（3） 第11回 第三文献研究（4） 第12回 第四文献研究（1） 第13回 第四文献研究（2） 第14回 第四文献研究（3） 第15回 第四文献研究（4）	
進め方	前期：スライド、ビデオなどを用いた講義。学生の発表も織り交ぜるので、積極的な授業参加を期待する。展覧会見学も行う。 後期：新古典主義とロマン主義について書かれた論文を精読する。展覧会見学も行いたい。		
テキスト	授業中に指示。後期のテキストはコピーを配布。	参考文献	各種画集など、授業中に指示
評価方法	レポート（4000字）：60% 前期展覧会レポート（2000字）：20% 出席・発表点：20%		

芸術特別研究（制作・論文）		通年 8 単位	
<p>【担当教員】  阿久津 光子（あくつ みつこ）、大野 芳材（おおの よしき）、趙 慶姫（ちょう きょんひ）、橋本 典子（はしものりこ）、淀井 彩子（よどい あやこ）</p> <p>【ねらい】  本科の「卒業研究」で達成し得たことを更に深める。</p> <p>【授業内容】  各専攻の中で自主的に追求し、学年末に一年間のまとめとして作品または論文を提出して修了展に発表する。各専攻ごとの内容は次の通りである。</p> <p>○制作系：修了制作は、課題作品と自由作品の二種を提出する。</p> <p>＜絵画専攻＞  課題作品／人物 油絵80号以上1点。  自由作品／油絵80号以上1点および版画。</p> <p>＜デザイン専攻＞  課題作品／平面（S80号以上）1点または立体。  自由作品／平面（S80号以上）1点または立体。</p> <p>＜織専攻＞  課題作品／織作品（100cm×200cm）1点。  自由作品／織作品（70cm×90cm）1点。</p> <p>○論文系：修了論文題目と論文の提出期限は次の通り。  論文題目／提出期限 2010年10月13日（水）午後4時30分（厳守）  修了論文／提出期限 2011年1月12日（水）午後4時30分（厳守）  論文枚数 400字詰め原稿用紙50枚以上  提出先／教務課</p> <p>【進め方】  各自、それぞれのテーマに従って、教員の個別指導のもとに自主的な追求が中心となる。</p> <p>【評価方法】  前期末および学年末の年2回にわたり、本学科全専任教員および全実技系教員により、学生1人ずつの合同講評会を行ない総合評価をする。  前期講評会 35% 後期講評会 65%</p>			

芸術各論	通年 4 単位	
<p>【担当教員】 阿久津 光子（あくつ みつこ）、大野 芳材（おおの よしき）、趙 慶姫（ちょう きょんひ）、橋本 典子（はしもの のりこ）、淀井 彩子（よどい あやこ） 各自の専攻した「芸術特別研究」の支えとなる科目で、専攻した分野の教員の指導のもとに学ぶことを原則とする。内容や進め方については、各専攻ごと学生のテーマに応じて担当の教員が年度初めに定めるが、「芸術特別研究」の充実に資することを目的とする。展覧会鑑賞を含む。</p> <p>【評価方法】 「芸術特別研究」と併せた平常点による。平常点 50% 出席点 50%</p>		

芸術文献講読 I	通年 4 単位	
芸術英語文献演習	橋本 典子（はしもの のりこ）	
ねらい	基礎的英語力を養い、英語で書かれた芸術論や芸術作品の解釈の文献を読解しこれを深く理解することを目的とする。特に、作品解釈や背景となる思想については独自に調べ発表することが要求される。	
授業計画	<p>【前期】</p> <p>第 1回 序論－英語圏の芸術論 第 2回 現代の芸術論の問題 第 3回 テキストの紹介 第 4回 テキスト確定、テキストの購読と解釈 第 5回 テキストの購読と解釈 1 第 6回 テキストの購読と解釈 2 第 7回 テキストの購読と解釈 3 第 8回 テキストの購読と解釈 4 第 9回 テキストの購読と解釈 5 第 10回 テキストの購読と解釈 6、参考作品の考察 第 11回 テキストの購読と解釈 7 第 12回 テキストの購読と解釈 8 第 13回 テキストの購読と解釈 9 第 14回 テキストの購読と解釈 10 第 15回 前期のまとめ</p>	<p>【後期】</p> <p>第 1回 序論－テキスト紹介、テキスト確定 第 2回 テキストの購読と解釈 1 第 3回 テキストの購読と解釈 2 第 4回 テキストの購読と解釈 3 第 5回 テキストの購読と解釈 4 第 6回 テキストの購読と解釈 5 第 7回 テキストの購読と解釈 6 第 8回 テキストの解釈と発表（全員） 第 9回 テキストの解釈と発表 1 第 10回 テキストの解釈と発表 2 第 11回 テキストの解釈と発表 3 第 12回 テキストの解釈と発表 4 第 13回 テキストの解釈と発表 5 第 14回 テキストの解釈と発表と具体的作品例の検討 第 15回 まとめ</p>
進め方	受講者が積極的に関わる演習形式で授業は行なう。受講生は英語の文献を読み、文献に書かれた内容について発表し討論する。特に21世紀の新しい芸術との関わりを追究したい。前期・後期共に試験を行う。必ず出席すること。	
テキスト	授業のテキストは受講の意向を重視するが、プリントを渡し、それを使用する。	参考文献 必要に応じて授業中に紹介する。
評価方法	出席及び授業参加態度:50% 試験:40% 発表:10%	

創作論（前期）		通年 4 単位	
人間はなぜ、創造活動を行うのか		淀井 彩子（よどい あやこ）	
ねらい	先史時代の芸術の発生から現代まで、一貫して表現されてきた核になるものについて考察する。芸術と人間についてその意味を理解し、学生自身の創造性の視野を広げ表現内容を深めていく。		
授業計画	【前期】	【後期】	
	第1回 人間はなぜ、表現活動を行うのか 第2回 先史時代の洞窟美術 第3回 フランス、スペインの洞窟遺跡 第4回 具像と抽象 第5回 平面と立体 第6回 模倣と創造 第7回 環境と人間と芸術 第8回 現代の環境芸術 第9回 女性の芸術表現 第10回 " 第11回 学生自身の造形表現について 第12回 空想美術館 第13回 人間と芸術 第14回 " 第15回 まとめ		
進め方	画集、DVD、ビデオなどを用い講義を進める。実技担当者による講義科目であるので、画家の観点を重視して講述するよう努めたい。できるだけ多くの意見交換の場をもちたい。美術館、画廊の展覧会紹介と鑑賞を含む。		
テキスト		参考文献	授業中に適宜紹介する
評価方法	平常点:50% 前期・後期レポート:50%		

創作論（後期）		通年 4 単位	
		阿久津 光子（あくつ みつこ）	
ねらい	現代における芸術表現は多様であり、さらに芸術がいかに生活環境と関連しているかを考えると、自らの芸術観を築くことの大切さが求められる。本稿では学生が創作における視野を広げ、その軸となるものを自ら考察していくことをめざす。		
授業計画	【前期】	【後期】	
	第1回 芸術とデザイン 第2回 原始のものづくり（自然の中で～素材と芸術） 第3回 自然との対話 第4回 色彩を求めて（自然の中で～素材と色彩） 第5回 色彩と表現 第6回 生活と芸術1 第7回 生活と芸術2 第8回 生活と芸術3 第9回 生活と芸術4 第10回 学生の発表と意見交換 第11回 環境と芸術1 第12回 環境と芸術2 第13回 環境と芸術3 第14回 環境と芸術4 第15回 まとめ		
進め方	創作の実作者の観点から、興味深い作家や作品を取り上げながら、画集やスライドを使用して講述する。できるだけ意見交換の場をもちたい。関連するビデオや展覧会鑑賞を含む。		
テキスト	特に定めず、資料を配布する。	参考文献	授業の中で適宜紹介する。
評価方法	平常点:50% レポート:50%		

意匠学		通年 4 単位
欧米や日本における近代デザインの源泉とその展開をたどり、現代の社会と生活を見直して、これからのモノづくり、環境づくりを考える。		椎原 晶子（しいはら あきこ）
ねらい	18～19世紀、欧米・日本等各国の工業化による大量生産、大量流通は、社会構造に大きな変化をもたらした。それ以前の手工芸時代と比較しつつ、近代技術と芸術、産業の有意義な統合を求めた近代デザインの展開を振り返り、現代の生活環境に与えた意義や課題を整理する。そこから、今後の持続可能なモノづくり、環境づくりのあり方を考える。	
授業計画	<b>【前期】</b> 第1回 産業革命、工業化、近代社会の産業とモノづくり 第2回 ウィリアム・モリスとアーツ&クラフツ運動 第3回 マッキントッシュとグラスゴー派の実践 第4回 日本の工芸・美術とジャポニズム 第5回 アールヌーヴォーの潮流 第6回 ウィーン分離派とウィーン工房vs. 装飾と罪悪 第7回 オランダの近代運動、ロシア構成主義 第8回 ドイツ工作連盟-芸術と産業の積極的統合 第9回 パウハウス1-造形理念と教育システム、実践活動 第10回 近代建築の理想：ル・コルビュジェとミース 第11回 都市生活とアールデコのデザイン 第12回 日本の生活改善運動、民芸運動 第13回 戦後のインダストリアルデザイン 第14回 デザインシヨールーム等見学 第15回 現代の社会環境とデザイン	<b>【後期】</b> 第1回 日本デザインの源流1: 絵画：絵巻物、掛軸、襖絵 第2回 日本デザインの源流2: 琳派の工芸美術 第3回 日本デザインの源流3: 陶芸の歴史 第4回 日本デザインの源流4: 陶芸の産地と作家 第5回 日本デザインの源流5: 漆芸・木工・竹工 第6回 日本デザインの源流6: 染織 第7回 日本デザインの源流7: 金工 第8回 日本デザインの源流8: ガラス工芸 第9回 日本デザインの源流9: 書院と数寄屋、庭園 第10回 日本デザインの源流10: 町家と町並み 第11回 デザイン実例見学会 第12回 現代のデザイン1: 輸出工芸から民芸、モダンデザインへ 第13回 現代のデザイン2: 情報、イメージのデザイン 第14回 現代のデザイン3: 環境のデザイン 第15回 現代のデザイン4: 地域性とデザイン、市民参加
進め方	前期は、産業革命以降の欧米日本における近代デザイン運動の理念と実践例に触れて、近代社会の中でデザイン運動が果たした役割を理解する。後期は、日本のデザインの源流を成す道具や住まいづくりの特徴を概観した上で、戦後から現代に至るデザインの取り組みと課題を把握し、今後の私たちの生活と環境づくりについて考察する。	
テキスト	『世界デザイン史』阿部公正監修、美術出版社	参考文献 『日本デザイン史』竹原あき子・森山明子監修、美術出版社、『20世紀はどのようにデザインされたか』柏木博、晶文社、『現代デザイン論』藤田治
評価方法	レポート:50% 授業態度・提出物:30% 出席:20%	

工芸		通年 2 単位
日常使いできる金属小物（カトラリーやアクセサリ等）のデザイン及び制作		山田 瑞子（やまだ みずこ）
ねらい	“工芸”と言う言葉は用の美を意味します。 この授業では金属（主に銀）を用いて実際に使える小物を作ります。 独自のアイデアを出し、デザインをして、いかに具現化していくかを体験します。	
授業計画	<b>【前期】</b> 第1回 銀の透かし彫り小物制作（ペンダント、壁掛け等） 第2回 銀の透かし彫り小物制作 第3回 銀の透かし彫り小物制作 第4回 銀の透かし彫り小物制作 第5回 銀の透かし彫り小物制作 第6回 銀の透かし彫り小物制作 第7回 すり出しのリング制作 第8回 すり出しのリング制作 第9回 すり出しのリング制作 第10回 すり出しのリング制作 第11回 すり出しのリング制作 第12回 すり出しのリング制作 第13回 鑲付け技法を用いたリング制作 第14回 鑲付け技法を用いたリング制作 第15回 鑲付け技法を用いたリング制作	<b>【後期】</b> 第1回 鑲付け技法を用いた小物制作 第2回 鑲付け技法を用いた小物制作 第3回 鑲付け技法を用いた小物制作 第4回 鑲付け技法を用いた小物制作 第5回 鑲付け技法を用いた小物制作 第6回 鑲付け技法を用いた小物制作 第7回 金鍍で打つ小物制作（小皿、スプーン等） 第8回 金鍍で打つ小物制作 第9回 金鍍で打つ小物制作 第10回 金鍍で打つ小物制作 第11回 金鍍で打つ小物制作 第12回 金鍍で打つ小物制作 第13回 金鍍で打つ小物制作 第14回 金鍍で打つ小物制作 第15回 金鍍で打つ小物制作
進め方	実習中心で進めていく、但し時間が少ないので各自充分に考えて、休まず取り組んでもらいたい。	
テキスト	特になし	参考文献 その都度用意する
評価方法	平常点（出席を含む）:70% 作品の評価:30%	

キリスト教と文化		通年 4 単位	
C. S. Lewisとキリスト教		伊藤 勝啓 (いとう かつひろ)	
ねらい	C. S. ルイス (1898—1964) の生涯を通して、その信仰と知性の在り方を学び、今日の文化に欠落しているものは何かを一緒に考える。		
授業計画	<p>【前期】</p> 第1回 概要説明+このコースを取った理由と自己紹介 第2回 ルイスの幼・少年時代 第3回 母の死と家を離れる 第4回 学校生活、兄と友人 第5回 カーク・パトリック夫妻とともに 第6回 第一次世界大戦の中で 第7回 ミセス・ムーアとルイス 第8回 信仰にいたる巡礼 第9回 クリスマスとなってからの文学活動 第10回 第二次世界大戦 第11回 ナルニア国物語 第12回 最愛の人Joy Davidman Greshamに会うまで 第13回 Joyとの短い結婚生活 第14回 ルイス最後の日々 第15回 ルイスとキリスト教	<p>【後期】</p> 第1回 発表と論評 第2回 同上、2 第3回 同上、3 第4回 同上、4 第5回 同上、5 第6回 同上、6 第7回 同上、7 第8回 同上、8 第9回 同上、9 第10回 同上、10 第11回 同上、11 第12回 同上、12+クリスマス祝会 第13回 同上、13 第14回 同上、14 第15回 最後の論評とまとめ	
進め方	講義を中心とするが、その間ルイスの作品を直接朗読してもらい、後期はレジメを作り、クラスで発表・討論し、論評を加える。		
テキスト		参考文献	C. S. ルイス『喜びのおとずれ』 これはルイスの自伝にあたるもので是非読むようにすること。また、コーレンの『ナルニア国をつくった人』を読む
評価方法	出席:50% 発表:50%		